

えひめの歴史文化モノ語り

県歴史博収蔵資料から⑬

「引札」とは、現在のチラシ広告に当たる。客の心を「惹(ひ)く」もの、客を店に「引」張ってくる札」などと言われている。

江戸時代から作成・使用されていたが、明治30年代に石版多色刷りの引札が登場して、大正時代にかけて新聞の折り込みとして大量に配布されるようになった。

当館所蔵の引札は「正月用引札」と呼ばれるものが多い。商店の店主が年末年始の挨拶も兼ね、限られた範囲の顧客に手渡していたもので、年賀状のような役割も担っていた。一枚の紙

事交さいよ木(諸事交際良き)「は太く大きくなり、金のなる木には小判などのお金がたくさん実っていく。人間関係を良好にするとお金になって返ってくるという、なんとも商売に合った絵柄といえる。

かいがいしくじょうろで木に水をあげる大黒天も、木の根元に座り、まだ小さな「子供大木」を「子宝はわたしのか、りじや」と大切そうに育てる恵比寿も、よく見る米俵に乗った姿や鯛(たい)を抱えた姿とは違った描き方をされていて面白い。

「正月用引札」はお店をPRする情報量は少なく、広告としての役割は小さい。しかし、そこには店主の顧客に対する新年の挨拶と幸多き一年になるようにという思いが込められている。

客の幸福祝う粋な挨拶

また顧客には、おめでたい絵柄であふれた縁起物と言える引札をもらうことを、正月の楽しみにしていた人もいただろう。

「正月用引札」は限られた範囲ではあるが、商店と顧客をつなぐ重要なコミュニケーションーションツールであり、新年の幸福を祝う店主の粋な挨拶だった。こんなおめでたいものづくりの引札をもらえれば「よ木(良き)」「一年が過(せ)すうだ。

(学芸員・甲斐未希子)

〈月2回掲載します〉

正月用引札



大洲の商店「亀岡養松」が配布した正月用引札
(明治―大正時代、県歴史文化博物館蔵)